續後拾遺和歌集　上

特別
へ4
8099
16(1)

ヘ4
8099
16
(1)

<2001-035>

早稲田文庫

續後拾遺和歌集巻第一

春哥上

春たちける日よみ侍ける　　前大納言為世

けさよりや春はきぬらんあらたまの年たちかへる空のかすみに

題しらず　　從二位家隆

朝ほらけ霞[illegible]春[illegible]

立春の心をよみ侍ける　　前大納言為家

昨日とや[illegible]春たちぬらし朝霞たなひく山の雪は[illegible]つゝ

春のはしめの哥　　源信明朝臣

[illegible]山雪[illegible]霞[illegible]春のしるへ[illegible]

題しらす　　大中臣能宣朝臣

霞[illegible]春きぬ[illegible]心の[illegible]

柿本人丸

春きぬと人はいへとも逢坂の[illegible]

開路早春といふ心をよませ給ける　　後宇多院御製

あふ坂の[illegible]鳥の鳴[illegible]春[illegible]

春来鶯遅といふことを

よみ人しらす

春霞たなひく空はなかめつゝ錦そくれきてひとはかしき

題しらす　　中務卿具平親王

鶯のこゑを待つと程へしも出て霞とともにたちそ屋に匂ふ

朝鶯といふことをよませ給うける　　御製

あさ日影さされは世に出まうつるの谷ふかみても鶯の声

谷鶯を　　後二條院御製

雪とき谷のとひをいてゝにかの鶯の人に春やしるらん

題しらす　　よみ人しらす

誘はれて谷のつけ出つる鶯の花なきやとも春をしるらん

女御徽子女王家哥合に鶯　　壬生忠見

我屋とは木すゑをたにも錦かとまちはすらくひすの人そかなしき

延喜御時の屏風に　　紀貫之

鶯のなくは志るきに梅の花色みえぬとや尋ね来ぬらん

題しらす　　よみ人しらす

ひとしけにあひしかれは梅花香をさへさそふ風そ悲しき

寛元々年後宮歌合に百首哥たてまつりし時

春雪　　民部卿為藤

吹おくる風もいそくか雪とちる花の名残はまた見えぬとも

松雪を　　前大納言為世

春きてそまさしく出ぬる谷の戸をはなれてゆく鶯の声

後九条内大臣家にて百首哥よみ侍ける時残雪

従二位家隆

春きてもいくかもあらぬ野やまには猶ふる雪のきえのこるらん

建保二年内大臣家百首哥に朝若菜

前中納言定家

たかためとなほ朝霜のきえぬる上小野にけさもわかな摘らん

題しらす

読人しらす

吉野山かすみたちわたりふるやわか身の原はなをもとめ

小野宮右大臣

春たては霞をわけて野へいてゝ若菜つみにと出ぬ日そなき

春の哥の中に

恵慶法師

あつさ弓春やきぬらん今日よりはあらたの沢に若菜摘なん

内大臣に侍ける時家に百首哥よみ侍けるに朝若菜を

光明峯寺入道前摂政左大臣

岩根こえ山のかけ路のあさ若菜つまれはけさも袖ぬれにけり

僧正遍昭に若菜たまふとて

よみ人しらす

君かため衣のすそをぬらしつゝ野沢にいてゝつめる若菜そ

三百六十首哥中に

曾祢好忠

ねせりつむ春のさは田におり立て衣のすそのぬれぬ日そなき

霞を

中務卿宗尊親王

さほ姫の衣ほすらし春の日のひかりにかすむあまのかく山

和歌所にて釋阿に九十賀たまはせける時屏風に

大藏卿有家

雪きえて此あちの山の峯はかつ暁けてかすむ空かな

文保三年後宇多院に百首歌たてまつりける時

関白太政大臣

志賀の浦の梢はかすむ也あくるとや山のはしらむ雲ぞ見え

正治二年後鳥羽院に百首歌たてまつりける時

皇太后宮大夫俊成

霞立つ此山へとかへるらん世は春に都は花にこそありける

春歌中に

前大納言為氏

春はかすみなをやたつらんふるさとの吉野の宮はやけぬれと

左大将に侍りける時家に百首歌よませ侍りけるに

又逢坂をすくとて　後京極摂政前太政大臣

あふ坂の山をこえてなかむれは霞にくもる志賀の浦波

嘉元三年後宇多院に百首歌たてまつりける時霞

入道前太政大臣

あまのすむ煙ならねと塩かまの浦の霞はたちもこめけれ

文保三年百首歌たてまつりける時

権中納言公雄

塩かまの浦のけふりの一すちにたなひくも見えすかすむ空

百首歌よみ侍りける中に

津守国助

伊勢のあまの霞のうちに神さひて春の衣を塩たれにけり

和歌所にて釈阿に九十賀たまはせし時の屏風

後鳥羽院宮内卿

きえぬとやなをさそふらん浅みとりそめてハ霞なりけり

春歌中に

後鳥羽院御歌

朝またき霞の底の志ほ風にゆられてわたる春の舟人

文保百首歌たてまつりし時

前大納言為世

塩屋のそとはるかにて行潮の波の原浪をかすむ春かな

前大僧正道玄

日吉社へたてまつりける百首歌

歌の中に

源兼氏朝臣

みつうみハ波もとほしし志賀の浦の花の浪に春風そ吹

[illegible]家殿御歌合のうち

平兼盛

山川のみなきはまさりて春風の花のおちたるけふのさくらか

春歌中に

後光明照院前摂政左大臣

難波江やあしのわか葉に吹風にみたれてすゝむ春のさゝ波

柳をよませ給ける

後鳥羽院御製

かけてなほ河水の川せの浪こえてもとふ青柳の糸

家に十首歌よみ侍りけるに柳露

山階入道左大臣

さほ姫のてそめの糸やくりかけて露の玉ぬく青柳

女御徽子女王家哥合 柳

壬生忠見

青柳の糸はみたれて春ことに露のたまぬくとや成らん

嘉元二年百首たてまつりける時 柳

二品法親王覚助

青柳のみとりは松のうつりきて年のをなる青やきの糸

題しらす

前大納言為家

春の日の光もなかき玉かつらかけてほすてふ青柳の糸

性助法親王家五十首哥よみ侍りける時

後西園寺入道前太政大臣

風ふけは柳のいとの玉ゆらもぬきとめかたき春のあさつゆ

禖子内親王家の哥合に梅始開といふ事を

讀人しらす

朝あけの風のふけはにほふなり里は霞に梅の花かけ

建仁元年後鳥羽院に五十首哥たてまつりける時

前中納言定家

白妙の袖とそまかふはるさめにみきりの梅の花のにほひも

題しらす

順徳院御製

あかなくにをらてそかへる梅花たか袖をや鶯の帰

幾かへりさもあらぬ梅花ちれともなくさめ

在原棟梁

冬なからさけは梅えも色そへて人のみ神よりしらめ

題しらす

中納言家持

梅花ちりの雨によりしほれつゝの花をわかれはにほひめかれ

土御門院御製

みよしのもしほの松ふく風はさゆる夜のかせかゝる月とみるらん

百首哥めされけるに

御製

道しあれはなをみちもあれはさらにまたふるも吉野のまくらかな

長久二年弘徽殿女御哥合に帰雁を

伊勢大輔

ゆく空もなくてかへる雁かねの雲井にかへる秋を志らなん

建長元年後嵯峨院に百首哥たてまつりける時帰雁

常盤井入道前太政大臣

あまのはら雲井の路のかへるさにかすみのうちやひとり侍らん

春哥の中に

前中納言定家

霜の浦の志はやさ衣たちかへりつゝまた志らぬ春の雁かな

ら色のそのことゝ五十首哥たてまつりける時帰雁を

右兵衛督為定

さかりの花かゝりかへる春ことにうらみんよそにやたちかへるらん

堀河院に百首哥たてまつりける時早蕨

大納言公實

春の野の草葉は庭とみえしかとよそにわかなのもえいつるさわらひ

和歌所にて釋阿九十賀給はせける時屏風に
前大僧正慈鎮
雪消し沢辺の木のめも春風にきのふしらぬもえやいそくらん

題しらす
藤原隆信朝臣
はる霞ひなの山をあさきりにこめて[illegible]ける

野春雨といふ事を
藤原隆祐朝臣
識人のあさちか原のあさ緑宮小かさとりて春雨そふる

春雨を
清原深養父
春雨やなへてそむらん錦哉山のみとりも色まさるなり

題しらす
前大納言為氏
春きぬと霞たなひくひさかたのあまのかく山花やさくらん

百首哥よませ給ける時に桜を
二条院御製
いにしへのかすみさへ春霞たちてとやまの桜なをもり

葛山花といふ事を
藤原基俊
立田山心もとなく花よりも雲井よりそ小初瀬の山

花の哥とてよめる
贈従二位為子
山桜さく川木の色もしるきそ都の人そさくらん

建保四年後鳥羽院に五十首哥奉りける時花を
参議雅経
かつらきや深山のやまさくらかへんゆきも花にまかふ春風

初見花といふ事をよませ給ける

伏見院御製

咲そむる山の花にみえてさと成らむ峯の白雲

題しらす　藤原為道朝臣

ちるもさきぬとみえてそあらしふくまゝに峯の白雲そ風

衣笠前内大臣

桜花いろにまかひし青柳のかつらき山に雲そかゝれる

前中納言匡房

白雲にたくへしやいつこかつらきのたかまの山に花さきにけり

花満山川と云事を　光明峯寺入道前摂政左大臣

吉野河岩にたゝえて咲花のさかりに浪も花のしら雲

題しらす　法印定為

春風はよその山の峯そはなれぬ雲やかゝれるらん

家に花五十首詠侍ける中に　後京極摂政前太政大臣

吉野川さくらは波よりたかき花の木すゑに成にける哉

續後拾遺和歌集巻第二

春哥下

千首哥よませ給ける時

後宇多院御製

志ら雲の五重はかさなりてみえつゝ宮木の山への桜なりけり

元亨二年亀山殿にて人々に花をさそへて千首
哥よませられける時　前大納言為世

見わたせは峯にちるとかさなれる遠山の桜は雲
にまかふ寿

院御製

あきれこゝ山の花をふかくなる春のみくもにいとはさらなり

百首哥たてまつりし時

前大納言実教

さくら咲春はいとゝも山桜さかぬたえまにかゝる雲

和哥所にて釋阿に九十賀給はせける時屏風

参議雅経

久堅の雲にたなひく小はつせの花の春の峯の

弘長元年百首哥たてまつりける時花

前大納言為氏

花の色はそれとも見えぬ山桜峯のしら雲まよふあ

雲かゝる霞の奥にてらす花は錦の空にさく

遠山桜といふ事を　源俊頼朝臣

雪かゝる峯の桜を見つゝ霞にまかふ花なりけり

文保百首歌たてまつりける時

前左大臣

山たかみ花とみえしは白雲の霞やはるの色をみすらん

津守国冬

鶏の声に雲井の山のはに大宮人やかさしおる覧

題しらす

頓恵法師

山たかみ花のさかりを見わかねて都の花やさきにほふらん

三条入道左大臣

春の夜の花の比桜を風のさそふ成見さりけり

御製

河花とのみせ行く水の

吉野川波のよるへの花のみかけに流るゝ水も春の夜の色

名所百首歌たてまつりける時

前中納言定家

さゝ浪や志賀の花そのかすむ日のあかぬにほひに浦風そ吹

元亨三年後宇多院にめされける住吉社三首歌合に海辺花

法印長舜

住吉やあさゝまやまの花さかり波にうつりて風そ吹く

前大納言定房

あま人の袖にうつるもしほ海のかけの花さく春の浦風

題しらす

従二位家隆

あまをとめ行かふせのひたちおりたつてかさす桜の花もちる波

津守国助

あすか風のとくにわたりたるやなかきの桜いそき給ひ
花時心不静といふ事を
和泉式部
のとかなる折こそなけれ花を思ふ心のうちに風はふかねと
永承五年禖子内親王家の歌合に桜を
藤原兼房朝臣
ちる花をよそにみる桜のかけひろき宿のあるしや風を知らん
侍臣に桜の下にて時花を折りて詩歌を合せ
侍けるに禁庭花といふことをよませ給ひける
亀山院御製
九重の雲井の桜いくとせかへりし千年の春をしるらん

題しらす　中務卿具平親王
さくらちる春となりけり世は花桜さかりは物はおもはさりけり
権中納言公宗母
雲とのみかゝりてそみしやまさくら花ちりてそ峰の嵐
霞中花を　後西園寺入道前太政大臣
風かよふ空に宿かるふるさとの山花そ春のことまなかりけれ
題しらす　伴嫁
見そめしの御物を山吹の花は小芸のあひたにまたあふみ
鳥羽院白川に御幸ありて花御覧しけるに白雲
侍ける　前参議教長
ちるもみなさくらちるゐせきの水はたえまなく春の白川の花のあるしは

花哥中に　西行法師

よし野山梢の花を見し日より心は身にもそはす成にき

花見にまかりてよみ侍ける　よみ人しらす

あすしらぬ身のならひにて山桜花さく里にやとはつけまし

題しらす　源道済

木のもとにやとりてきかむやま桜ちらぬかきりは何か惜まむ

元亨三年七月亀山殿にて七百首哥よませ給ける時花哥

藤原為明朝臣

あくかれてちりての花の行末を山路の日数経にけり

花下忘帰と云事を　源兼氏朝臣

日をすくるいくかに成ぬ山桜ちるを待とや猶帰るまし

亭子院哥合歌　大中臣頼基朝臣

しらぬめにたにきて見む何せむ桜ちるまてこゝにあそはましかは [illegible]

伏見院位におはしましける時花十首哥よませ給けるに　前大納言俊光

きのふみしたかねの雲そ晴にける嵐のすゑの風に花やちるらん

花哥中に　津守国道

見わたせは梢の雲はいつくれかゝりてひらくる山桜かな

花十首哥よみ侍けるに

贈左大臣　長實

雲ふりハなを見ふにきもむ山桜ちるをかれハ霧けり
題不知　典侍親子朝臣
うつりゆく花の根やのこるらんさくら世ならぬ風のなき世ハ
圓光院入道前関白太政大臣
吹風の名にかはる春なれは花ものとけさをミえ行まし
久安六年崇徳院に百首歌たてまつりける時
大炊御門右大臣
花のちるたひに人もをしむハあやなく春のうらめしきかな
花歌中に　寂蓮法師
年をへて待まれし梢はちりてもちらすにまさるなりけり
天徳四年内裏歌合歌
兼盛
我宿のさくら花ちる時ハ庭もせに花やちるらん
亭子院歌合に　凡河内躬恒
めにみえて風ハふかねと青柳のなひくかたにそ花ハちりける
題しらす　順徳院御製
ちりぬるを山ふかき桜をまかせてこそめね籬の糸
落花をよみ侍りける　前大納言経継
こゝろからうつろふとみえぬを風にはたゝその花の浪
前大僧正道性
志賀の山桜袖にちりかゝれハ山風も吹きて花ちる春の浪
元亨百首歌たてまつりける時

皇太后宮大夫俊成女

花なき雲に花やちるらむしら雲のかゝらぬかたもなき山

嘉元百首歌たてまつりける時花

贈従三位為子

ちるはうき物とも見えす咲桜もあらしに海の方にゆくらん

見る人もなみ花のちりつもる雪のいろ（いろ）みえぬる

枇杷左大臣

ちる花もあかぬ物とはなけきとかくてのことそ春はありけれ

落花の心を

藤原為親朝臣

雪とのみ花そちりかふ志賀の山雪にまかひてや風かよふらん

大宰大弐重家

桜ちる嶺の山風ふけはむかひの雲にそ雲はなりける

千首歌よませ給ひけるに

後宇多院御製

ちるはうき雲となりなて桜もやさそひし風のあとにさえぬらん

みこの（こ）ゝろもけふ時花の雪そまませ給ひける

伏見院御製

木のもとはふるあとなれは年ふれとまたみぬよしの山の花白雲

花ゝ歌

西宮左大臣

さそふ花もあらし春風は吹とてや海（うみ）のこと後と知るへく

橘俊綱朝臣の伏見家にて人々歌よみ侍りける時

花といふ事を

権中納言通俊

春の人あはれにかへてまし宮こまて世の花なき里せゝ
花しらす　人丸
ゆくて花のしるしぬきしと我おもふ色ある嵐も吹かなん
後京極摂政前太政大臣
ぬしさへこむ花よりさきの故郷の春の夜半の月の風の月也
正治二年百首歌たてまつりける時
前中納言定家
花の香もかすめる月にあくかれて夢もさたかにみえぬころかな
元亨三年八月十五夜後宇多院にて月卅首歌たてまつりける時
二品法親王覚助
月にあまるかすみて花の梢よりえてひかりさへかすむ春の夜の月

春哥中に
経宣朝臣
花ちるにたきつるかりの声さやけくて世春霞月
尾上の鐘の暁かねとそ月をみるかな
前大納言公任
こゝろみに月かけのせに額の春の山へのかすみにもいかにかたへきて
元亨三年八月十五夜月卅首歌たてまつりける時
権中納言公雄
出そめんほとにはしはしつゝ霞むとも新ともむいさよひの春の月
春月を
平宣時朝臣
春の夜はかすむともなほ思ひいつるにや月のかけ
禖子内親王家歌合に霞隔月といふ事を

中務

霞にたちかゝる色とも春風の月をなとへいかにかくらん

寛治二年百首めされし時 春月

後嵯峨院御製

流れてはかすみにまかふ春の夜の月かけかすむ春の梢に

浦春月といへる心を 後二条院御製

あし火たくなにはの浦の春の月とまやの軒にかすむ影哉

題しらす

読人志らす

たえまくをまちかねかすむ宇治橋とそこに霞める

前中納言定家

春の夜の霞める道のつかすまれ橋てゆめの浮橋のあと

読人不知

佐保のあさ沢を分る蛙なくなり春のひかりに百千鳥

百首歌中に

源重之

宇治川の井手の蛙のこゑすなるかはつなく也山吹の花

寛和二年内裏歌合に

藤原惟成

蛙なく井手の山吹咲にけり見る人もなき山吹の花

堀河院百首歌に

大納言師頼

かはつなく井手の山吹ちりにけり

題しらす

後鳥羽院御製

春日山みねの梢にかけて見る花の色そ(?)……

大神宮にたてまつりし百首歌の中に山桜を

前大僧正慈鎮

山吹のちりかふ比は……

雨中落花をよみ侍る

平泰時

いはしみつ……

住吉社にたてまつりける百首歌中に藤

前大納言為家

たのみこし……住吉の松に花さく春の藤なみ

嘉元百首歌たてまつりしとき……

法印定為

春せし海のありそによする白浪のかけてにほへる春の藤なみ

百首歌奉りし時

前関白右大臣

田子の浦やみさきの藤の咲ぬれは浪もむらさきの色にそ有ける

御製

春の行をしむ心を……

題しらす

前大納言為氏

かへるさは春はいくかもあらなくに花の……

文保百首歌たてまつりし時

前大納言為世

せめて猶……

三月盡鶯といふことをよみ侍りける

ことしより春のしるへの花さかりさそふ風にもしらぬひまかな

藤原信實朝臣

續後拾遺和歌集巻第三

夏哥

建仁元年五十首哥たてまつりし時

前中納言定家

桜いろの袖もひとへにかはるかなうつりし花の色をしたひて

源重之女

かはるへきとは思ひしを花の色をしたふ袂のなをさやかなる

一條院位におはしましける時内裏にて卯月の比八重桜のさかりなりけるを見てよみ侍りける

紫式部

九重ににほふを見れは八重桜かさねてきたる春のさかりか

遅桜をよみ侍りける

道命法師

いまよりはあらし桜をゆき春の中になかれとしらん

禖子内親王家哥合に卯花

讀人しらす

卯花のさかりなりけり山川の垣ねならぬ浪こそ海明んを

元亨三年五月後宇多院に十首哥奉りし時にも

民部卿為藤

夏衣ほしも海士の千寸玉川の井ても浪よせよさは鏡

文保百首哥をたてまつりける

前中納言為相

卯花の咲ぬるや初瀬河志らぬ浪こそ春にこゆらん

久安百首哥よそへて時

皇太后宮大夫俊成

ちるやまかひの風はあひのまかさなり月も紛ひけり明

題しらす

順徳院御製

誰しかは梢にかはる松のあらひ草かつくもちゝちる山の雪

百首哥よませ給ひける中に

二条院御製

郭公枝のみ山のかくれなきかはりゆく人のありきや

時鳥を

二品法親王慈道

しのひ待つのみちもはや郭公ひと川に海りそ繞めり

今出河院近衛

思ひ寝の夢まてのこる時鳥さ月まつよとこゑそきこゆる

二品法親王家に五十首歌よみ侍ける時郭公

法印長舜

鳴てはしそなかれねさめけさはかたらふきほとゝきすひとつ又聲かれ

高陽院歌合にほとゝきすを

藤原顕經朝臣

あくかれてまちこそ山の郭公ゆふつきよそやくれんとすらん

杜郭公を

左大臣

杉たちやとふの杜に時鳴るわきた神代のおとをかたるらん

月次屏風歌に

従二位家隆

神なひの杜にはそけれよかたらふ郭公の杜かなかりなき

郭公をよめる

平忠盛朝臣

すめらきのよろつよもや郭公かはらぬ影のちよの聲そきく

文保三年百首歌たてまつりし時

前参議雅孝

かくはきよたかつ卯花のかきねにほのか風のねそきく

題しらす

前参議雅有

鳴そきて年はなけれとも時鳥雲のいそれに待はなかんなり

前参議為實

郭公夜半の雲をとひてもなけとそ我そきく

中務卿宗尊親王家百首歌中に

前左兵衛督教定

まくけ明ゆく空に行かへり山郭公きゝつとなき

和歌所にて撰哥合せさせ給ける時の屏風に

参議雅経

一声ハ思ひそあへぬ時鳥たそかれ時の雲のまよひに

大炊御門右大臣

入てのこ比葉をしては郭公まつ聲のひとつ聞られ

待郭公といふことをよませ給ける

御製

人伝にまてともあかぬ時鳥ねさめの夜半の聲ならぬ

このきくこともきかて時鳥

中務卿尊良親王

鳴なきを夜すからまちし山郭公ことしも今宵まちあかしつる

文保百首哥奉りし時

入道前太政大臣

なほさりに待やとさらは郭公はつ聲きかん人もこそあれ

百首哥奉りし時

右兵衛督為定

鳴きなハ声のひきてそ聞ゆる郭公夜半の月をなかめしかは

嘉元百首哥奉りける時郭公を

贈従三位為子

ら(?)ぬまちて夜もすから郭公なきにしてかへるならん

待まちし空に時鳥色のさえはことも暮天郭公と

峯に残るまつの花の井くま
白河院御製
名をさへ空にかゝりて郭公きなくをまつに加茂の井(?)の花
千五百番歌合　前大僧正慈鎮
いく里をかけてひすらかきとほるはゆふつけ鳥の聲
海邊郭公といふ事を　權律師實性
難波人いやまくらに聞つるこやの志のやまつ郭公なり
題しらす　達智門院
かたらへる雲井はるかに志のひ郭公なれたのむ郭公なれ
大納言經信
さ夜ふけて人めの郭公こゑは志のひ聲のすきかよふなり

元亨三年七月亀山殿にて人々題をさくりて七百首
歌つかうまつりける時夜郭公を
權中納言公雄
風とむる人やきゝつらんみしか夜の月をも待たて郭公山ほとゝきす
題しらす
平宣時朝臣
一こゑはなほもとききつ郭公ねさめの枕にしのひ鳴なり
よみ人志らす
郭公なほをちかたのやまのほとゝきす山の松の
時鳥をよみ侍ける
堀川院中宮上総
霍公鳥ぬさむら山やおなしくはなきてそのこゑきかせなむ
一品内親王家のときの四季の屏風に

前大納言為世

かくときゝ渡しへてかれし思ひの杜の梢をかれすなく(?)

花しは(?)

昭慶門院一條

雨とくの杉の本すゑに夕露の涙おちそふさすの(?)

家に哥合し侍りける時郭公

左京大夫顕輔

ほとゝきす名のりてもゆく一声の名残よいまそれなるらん(?)

たゝ明仙と(?)

宣旨典侍

あはさくありや声しのんと残りゆくかたそ叢に(?)

中納言行平家哥合に

読人しらす

ねふきさけつ人あまや郭公まちたにきゝの哉(?)

和歌所にて釋阿に九十賀給はせける時屏風に

後鳥羽院御製

かけにふる海やみしむ郭公やこゑさそふすゑの里人(?)

弘長百首哥たてまつりし時郭公

前大納言為氏

あま雲のよそにかけて鳴時鳥さすかに数そ過(?)

ほとゝきすを(?)

在原元方

きゝつゝもなりたえぬる郭公をちかへりなく声のなかりせは(?)

郭公早きこといへるなりけり(?)

前中納言匡房

あきかせハ嵐こそきけ女郎花なかのりをそへて女郎花

きりし次　　津守国夏

時きぬとなく時鳥なにこゝにそきゝけるへやほとゝきすん

元亨三年七月亀山殿にて人々花をとりて七

百首歌詠ませ給ひける時早苗といふ事を

前大納言為世

宮にとるさこりてあまたにきけとも山田のさなへ程ぞなき

貞治百首歌めしかへしに早苗

後光厳院御製

あまの山田の早苗にすくる民の心わさハかはらさりけり

文保百首歌たてまつりける時

権中納言公宗母

わきもこのいきのうはへはおのかものゝ神のさまてもしらかへるらん

玉橋と　　平維貞

たかまのはらのはひにけふも夕風にいなはそよきて鳴秋の月

康暦二年内裏後番歌合に五月雨といふ事を

権中納言通俊

たちかへるとこの五月雨に日はくれぬ折の宮のうちとけぬれて

和哥所にて拝賀行ける時屏風に

大蔵卿有家

泊瀬川井ておもる波のしつくさえまたいへあかくなる五月雨

百首哥奉りし時　　関白太政大臣

水海さへなかれは河となりにけりいくかへて五月雨の比

嘉元百首歌に五月雨　萬秋門院

あさか河みつさへ深く五月雨にあさ瀬たえてやわたる人なき

弘長百首歌奉りし時五月雨を

前大納言為家

大井河となみさへ降ぬる雲もわかぬ山風さそふ五月雨の比

文保百首歌たてまつりける時

入道前太政大臣

落たきつ水のみかさの山河をとゝろかすやむ五月雨の比

寶治百首歌たてまつりしに五月雨

従三位行家

五月雨は山のしつくも落そひて岩波まさる菅川のみを

五月雨を　中務卿宗尊親王

杣河の河せもたえたり河よとのひまなき山のさみたれの比

従二位家隆

かはやしろかよふ浪にもかゝる三輪のひもたえぬ五月雨の比

和歌所にて六首歌よませ侍りしに夏歌

前中納言定家

さみたれの山のゆかりにたえぬ郭公なれ

覚し

祐子内親王家紀伊

時鳥ゆくゑもしらぬさみたれの雲のたえまのあま人の舟

弘長百首歌たてまつりしに郭公

常盤井入道前太政大臣

まちなれしやさ月の比の時鳥庭のをしへの道ほすまてこそまて

千五百番歌合歌　前大納言忠良

ふけぬやと鵜舟のかゝり五月の都こなたになく郭公の雲の梯

五月雨に晴にしかりし時鳥のなけはさかりよみ人はらふらむ

よみ人しらす

今もなほ誰か夏志の友なれとさ浪誰か名にたちさらぬ道

題しらす

信濃なるすはの海の鵜舟に時鳥なくまきけはこゝに家はふり

夏の夜は宮は何やなく鳴ぬへし郭公月の明るまて

宰相典侍

あか月の比あけやすき杜の人は川きくはかりの影をすむ哉

邦省親王家五十首歌に夏月

前中納言季雄

絹わたるなかれての秋風に吹たへ木の間さすみちの影のつゆ

元亨四年五月後宇多院に十首歌奉りける時

夏の夜は

忠房親王

夏の夜は空にすみつる月影のみちのくまよりうすき雲かな

題しらす

祝部成茂

夜の秋はたちきぬらしの夏をこそみしかきこゑそそふかなし

建仁元年五十首歌よませ侍りける時

後京極摂政前太政大臣

鵜かひ舟こゝを瀬とや世のかきりまたしも見えすかゝり火の影

夏の歌中に　好忠

夕されはわかやとさりてみ(?)山(?)かは(?)の浅沢の螢なりけり

三条院みこの宮と申ける時帯刀陣の歌合に

螢　読人しらす

難波かたいりえにすかりかとみえつるは葦まに(?)螢なりけり

后宮百首歌たてまつりし時

前中納言定家

さそてや絶ぬ限りにしのふむすふ袂の光は螢なりけり

題しらす　内大臣

燃わたる沢辺の草葉みな夕露よりも光は螢なりけり

嘉元百首歌たてまつりし時螢　侍従隆教

秋近き光をみせて夜な夜なの露に宿かる螢なるらん(?)

文保百首歌たてまつりし時　従二位宣子

夜ふかき草葉のうへにみたれ露や秋まての螢なるらん(?)

題しらす　中宮

志かりある草葉の色の露まてもかけにみえぬる夕暮の空(?)

天台座主兼覚法親王

なる神のおとはるかにきこえつゝなかはゆふ立の空(?)

堀河院百首歌に　前中納言匡房

庭へむけて志けり今日にしもきて庭前の清水友をてらす

文保四年首斎たてまつりあつらひ

津守国冬

人知らぬ源となりて蝉の声も絶えず衣手山のもとかく

河内納源と云事を　後西園寺入道前太政大臣

名さ残は松吹風のおとをもすゝしきと源山の志たくけ

元亨三年七月亀山殿に七百首

奉らせ給ふとき清井てふ

後宇多院御製

駒とめて志はしすゝまむ打渡日の影浅の水の浪

六月祓をよませ給ひし　新陽院御製

御祓川なかれてきよくたちかへる日のもとの風月に

後光源院

續後拾遺和歌集巻第四

秋哥上

立秋のこゝろをよませ給うける

御製

けさはまたきのふにかはれる風のたよりにつけて秋やきぬらん

千五百番哥合に

皇太后宮大夫俊成女

秋くれは有しにもあらぬ物となる里にふきける秋を告し荻の上風

題しらす

大納言経信

うたゝねの床にしもあきかせの衣手の中にや秋をしるらん

嘉元百首哥に

贈従三位為子

いつしかや袖にしもむ白露を袖にのこして秋はきにけり

文保百首哥たてまつりける時

民部卿為藤

露むすふしのゝ篠原ふしてみむ秋のたつより秋そ来にける

前大納言頼経家にて早秋の心をよみ侍ける

藤原基隆

きのふまて星のあふ川秋をめくりてゆきあひの空に秋風そふく

題しらす

山辺赤人

天河かよふせのはしもたえぬれはわたらぬ中に秋そきにける

二星適逢といふ心をよませ給うける

後二條院御製

乞あらは川浪たつらし河なみにさし川よれ舩出の夕風

讀人しらす

天川やとしこす時の枝こそ舟の渡せさはくり

題しらす

あまの河霧たちわたり彦星のかちの音きこゆ夜の更行

源兼氏朝臣

天川とわたりの橋のまちかねてやゝ夜そふけ行くるへん

参議雅親

あまの河舩のわたりのかけはしは雲にかけはせる鵲橋

中宮大夫師賢

百首歌奉りし時

七夕の秋の一夜のちきりこそ空にいつまてのためしなりけれ

院御製

題しらす

七夕の五百機たてゝをりしもあまたの秋にいそくらん

六條院宣旨

あひみても根はとけぬ七夕のかへるさにかさぬあまの羽衣

正安三年七月内裏にて七夕七首歌よみ侍りし時

前大納言為世

なかき夜のなかなかに七夕のつきに月日をこえてまちわたるらん

堀河院百首歌に七夕の心を

祐子内親王家紀伊

七夕のあふよや秋の夜はながき人のはひく糸のまつをそ待

題しらす

源忠朝臣

逢ふにこそあまの河原はわたれとも天河なかれたえせぬ瀬

圓光院入道前関白太政大臣

夏河はきのふにかはるゆふしほの末に秋ある松やかよふらん

平重時朝臣

あまの川いはこすなみのあふせにも一夜に袖やぬらすらん

文保百首歌たてまつりける時　前大納言實教

七夕のひきかはす袖の秋風はかへるあしたのかたみなりけり

性助法親王家五十首歌　後西園寺入道前太政大臣

かり衣袖のしたはをそよかせて秋風ふけは露そこほるゝ

荻しつ次　前大僧正實超

妹たちもしはしふかきしたの露よりもしるく袖のものとこそなれ

和哥所にて六首歌たてまつりしに秋歌　後京極摂政太政大臣

萩原や野中に秋の露ふけはあはれまつむしのさそふ庭

荻風を　前大僧正慈勝

音たてゝ庭うつ荻に秋風のふきもたえせぬ庭の荻原

文保百首歌たてまつりける時　忠房親王

秋風の吹そめしより萩の葉のそよくをきけはものそ悲しき

嘉元百首歌たてまつりしに　昭慶門院一條

草木もなを色々に露おくらん籬のあたりやよるのあさぢ
尽ぬる実とやけふの時雨にそそまつ付けり

嵯峨天皇御製

みな人のその香にめつる藤はかま君か御ためと手折つる
御せし

平城天皇御製

忍ぶ人のこの色にも藤はかまもとの主にたちかへるかな

正治百首哥に御津守りまつらし

皇太后宮大夫俊成

たなばたの手枕をむすぶ袖のいとどかはくる薄かな出まねけり

薄よりみまほ世行けり　後二條院御製

志ら露の思ひのほかに打ちぬれてまかすなる野のすゑの薄を

風の寺花をまつ　後京極入道前太政大臣
ゆりのきそやかなるかたにひさしく神すれてこからそ雉哉

閑院贈太政大臣家哥合に

讀人志らず

雨神もかせをかぞへてたちそれむ露らに吹風なびくあまりけり

天暦御時哥合に　恒徳公

年をへて咲はしぼりし女郎花も宮ぬらわかりと思ひ俺さけん

郁芳門院哥合に女郎花

安藝

秋なるしらずも白露に草葉枕を道に
文保百首哥にそえまつりまへて

前大納言経継
露ふかき床の草葉の妹にしもそへて偲ふらん

うへのをのことも三首歌よみ侍りける時萩花を
権中納言實任
色ふかき秋の錦の露の玉しく庭の萩か花

康保三年八月十五夜内裏前栽合に
皇太后宮権大夫博雅
いろいろの花とも見えし白露のおくかひある今宵哉

為道朝臣
題しらす
うつろはん秋もまたぬかきのへの萩か下露

三條右大臣
色かはる白萩の下葉にしほれつゝ妹か袖とも露やおくらん

正治百首歌よみてたてまつりける時
正三位季経
宮城野の小萩をわけてゆく人や本あらの露の涙なるらん

うへのをのことも三首歌よみ侍りける時萩草花を
民部卿為藤
たかまとの野への萩かはなのみにあさゆく露や清き影

秋歌中に
素暹法師
露寒み庭の小萩のちりぬきにたかしへの袖なるらん

前右大臣

わか袖に又たくひなき露のむすふ籬のあさ萩も

読人しらす

宮城のゝ原の風かよふやさしきにかほる萩か花そたつらし

山階入道左大臣家十首哥に野草花といふことを

しらみぬりまつ

三條入道内大臣

けふすくる人の袖まて宮木のゝ萩の錦にうつろひにけり

題しらす

瞻西上人

妙こゝろてあさゆくかれは小萩か原鹿のしからみ錦なりけり

藤原為隆朝臣

萩か花うつりはてゆく秋風の身にしむ夕暮にしかそ鳴也

皇嘉門院別当

宮城野の萩の下葉の色つけは秋しるとや鹿の鳴らん

寛治百首歌たてまつりける時夜鹿

花山院内大臣

妹といはゝ[illegible]てや鹿の鳴覧

土御門内大臣家哥合に鹿

侍従乳母

物思ひて秋の野ことに鳴鹿の声[illegible]

題しらす

如願法師

小山田の風の吹しく[illegible]鳴鹿の[illegible]

文保百首歌たてまつりける時

権中納言公雄

かせをむかふ草葉の露に秋まちの床にしられて
千首歌よませ給けるに
後鳥羽院御製
秋ふかき野分の風をさむみとや棹鹿の妻をや草むら露に
おもふらん
修理大夫顕季
夕月夜すさましくなる風にいかなる野辺の鹿のいまや鳴らん
百首歌たてまつりける時
参議雅経
津の国のいく田の杜の秋風に鹿の声たつる杜の下露
秋歌中に
前大僧正良信
妹をこふ涙をなれか声の露は我宿ちかくなく小鹿の声

元亨三年九月十三夜後宇多院にて三首歌講せられし時月前鹿
春宮大夫公賢
すむ月の影をいかにしたひてか木の下かけに鹿やなくらん
権中納言公明
月影にさそはれ出て野も山もあさちか末に鹿や鳴らん
建保二年内大臣家百首歌に谷鹿
前中納言定家
さを鹿のあさゆく谷の玉かつらおもかけさらぬ妻やこふらむ
秋歌中に
平宗宣朝臣
よそにたにかなしきそさ鹿の声まつ山の嵐の夕暮
前大納言為家

いかにせむ晴ぬ思ひのなくさめにきくそ鹿の音の物うき

郁芳門院根合に　　　　俊頼朝臣

おのつから身をなくさむる鹿の声をきけはあけて鳴なる日さしは

題しらす　　　　壬生忠岑

山里に秋たにかくや鳴鹿の音のせめても鹿そなく有けり

建保二年秋哥たてまつりけるに

従二位家隆

かゝみ山[illegible]秋となりゆく雲井の鹿をいまやなくらん

題しらす　　　　人丸

わかやとの[illegible]鹿をなきこす白露に[illegible]あさちにおける鹿ゆゑ

中納言家持

雲井まて鹿そ鳴なる秋風をきけはあさちにみたれあふらん

為道朝臣女

何ゆへか残る秋風に夜かれの鹿の音の帰るらん

聞毎にいたくあはれさそふ

二品法親王性助

妹をおもふ鹿の声やたにこゆる庭の萩原

題しらす　　　　恵昭法師

朝な〳〵鹿の鳴音をきゝけるに月の色のあき風吹

躬恒

秋ことに振ける鹿はなきつゝもかの子は夜中やすらん

平貞時朝臣

冬ざ萱山しぐるゝ紀霧の上にぞ起きてくる秋のなごりを

権中納言長言

夕ぐれは風もすゞしき紀の川のそこみるまでに霧立わたる

前太政大臣

家に五十首歌よみ侍りける時　河霧

三時の峯の庭そらに波や庭の川の入江も霧たちにけり

入道二品親王道助

守覚法親王家に五十首歌よみ侍りけるに

長月の末つかた月を見てこもる霧たちこむる宇治の川波

野宮左大臣

今宵秋の日影の雅に月まつ人のなかに出でけり

題しらず

永福門院

松の風の尾上の空にさえ行けば月はしづかに秋の露月

伏見院御製

雲晴るゝ夜半の空は晴れて松かげにひかる山の端の月

文保百首歌たてまつりける時

法印定為

嵐吹く空はくもりて雲は松に山のはの月をいだけ

三首歌の中に三首歌よみ侍りける時初秋月

大納言親房

秋の夜の月を待つ松の風もむかし風の音ぞかはらぬ

御製

久堅の月のかつらの紅葉ゆへてらさぬ秋はあらし事なる

普光園入道前関白左大臣

題しらす

住吉の松ふく風も久堅の月のかけにやさえ明ぬらん

元亨三年八月十五夜月五十首哥よませ給ける時

二品法親王覚助

くもりなき御代のさかりにあふ月も嵯峨の山にて昔なる古

堀河院百首哥に　駒迎

権中納言国信

あふ坂の関の杉むら霧こめてたちとにみゆるもち月の駒

題しらす

弁乳母

春秋に思ひみたれていつれともなからあかぬ月はまさりけるかな

続後拾遺和歌集巻第五

秋歌下

元亨三年八月十五夜後宇多院にて月卅首歌講せら
れける時　民部卿為藤

久方の雲井に月のすむ夜半はまいてさぬかたもあらしとそ思

百首歌奉りし時　権中納言公雄

月影のくもらぬ空も海とえ鏡つくしの秋をかけくらふらん

御製

山鳥のおろのはつをに秋の夜の月や鏡とてりまさるらん

元亨三年八月十五夜五十首歌めされし次に

後宇多院御製

なかむれはいつれのかたの秋の月よそにもうつるなかなかれ

百首歌奉りし時　前大納言為世

いさゝ河月に流せそわかりやかくせに流るゝかりそゆとみも

式部卿久明親王家三首歌中に月前秋風

平泰時

空きよき雲の波ちを行月のみ舟も山に帆をせて吹

文保二年百首歌たてまつりける時

藤原行房朝臣

わたの原八十島かけてもる月にあくかれぬ浦の梶の舟人

船中月といふ事を

源家長朝臣

ゆらの戸の浪のうへ行月にさそはれてこきいつる舟

文保百首歌たてまつりける時

津守国冬

あら磯の月すむかたは浦風にふきのたく火も光そふらん

江月を

入道親王尊円

難波江の入江のあしのうらかれに月そやとれるまきの浦浪

水上月といふ事をよませ給ける

鳥羽院御製

さゝ浪や志賀の浦わに霧はれて月すみわたる唐崎の浜

月の哥とて

永福門院

ふけゆけは浦きれ松山の霧はれて月影すめる宇治の川浪

二條院の百首哥たてまつりける時おなし心を

刑部卿範兼

神なひのみむろの山の雲晴て龍田河原にすめる月かけ

題しらす

法眼行海

あらし吹河瀬にかけてすむ月の山のはたかく新にさやけさ

後徳大寺左大臣

まやせ河あさ瀬みなきる月かけはや水さへもこほるよなよな

大宰大弐重家

ゆふの原ふく風そよく月影はむら雲にかゝるやとりそすれ

中納言家成家哥合に

藤原顕方

天河風そよくせの瀬やあまのかはきよくそすめる秋の夜の月

秋哥中に

光明峯寺入道前摂政左大臣

らぬとたに我なく秋をあはれなれは庭に月影

亀山院御製

さよふけて月やひとりの庭さらん人影のうへまて萩の花哉

文保百首歌たてまつりける時

後西園寺入道前太政大臣

浅茅生のをのゝしら露吹風にあまりて月の影そこほるゝ

山月を

津守国道

かけ清き秋の夜の山の月影に松風ふきて雲もかゝらす

藤原基任

しら玉のをすそのゝ月影にみかれてかゝる松のした露

後鳥羽院にたてまつりける百首中に

如願法師

冬のよは月影さむしたつ波の袖のうらなる霜やおくらん

前大納言為世よませ侍りける春日社三首歌中に

藤原盛徳

高砂のをのへの松風よふかき秋そさえまさる月をみるかな

月歌とてよめる

藤原宗秀

今宵こそ松のひさしにみえぬ秋霧のうちに見えける月影

建仁元年五十首歌たてまつりける時

後京極摂政前太政大臣

さむしろにまちよる秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫

中務卿宗尊親王家歌合に

前参議経清

老となる身ひとつはかはらねと月みるよはのあはれそかはる

弘安八年八月十五夜亀山院に三十首歌奉りける時
夜ゝに見月といふ事を　前大納言為氏

忍ひねはしのふとなくなかめこし年のつもりの月のかけかは

題しらす　祝部成茂

つれなきやともに稲山のむらしくれ秋の中なる月もしらなん

人麿

木のまよりうつろふ月の新枕さえまさりゆく秋の夜の月

建仁元年八月十五夜撰和歌所歌合深夜暁月　太政大臣家

といふ事を

花ゝのこかれなれゆくみ夜の桔にむつかしのゝ月

文保百首歌たてまつりける時　右兵衛督為定

きりくす秋をつくす枕の下に庭もせのむしや鳴らん

蘆錦出題といふ事を　伏見院御製

草葉にたま露乃手そなかき宿やならぬなかなかに

題しらす　従三位為理

浅茅生のその志かの深き露にあはれこの秋の夕露

建保四年百首歌奉りける時　後久我太政大臣

蟋風よかせゆく虫の松もとの草いほり露のむすひを
題しらす　従二位家隆
きく人そ波志のゝ嵐ふかきよや秋の草木なき人
風前擣衣といふ事を
　藻璧門院少将
身にしみて秋風の聲そ悲しきや山かけの川の人
寛元百首哥よみ侍りける時擣衣
　法印定為
たゆみのおもひ見きむき枕風寒き衣うつなり人
題しらす　為道朝臣
風さむみ十すゝきにも夜の月のうへゆふに衣うつ也

建長六年亀山殿にて五百首哥講せられし小序に
てよみ侍りて河辺擣衣といふ心をよみ侍ける
　徳大寺入道前太政大臣
あふ里は秋の河風さむけれはたえまもみえぬ川なみ
後一條入道前関白左大臣小さく里擣衣といふことを
めり
　源兼康朝臣
あもらし風袖ふく秋のさむけれは濱さとの里に衣うつなり
文保百首哥たてまつりける時
　前大納言俊光
衣うつこゑも里のいつもさむけく秋風になりぬ秋の山風
題しらす　今出川院近衛

大井川をとにきゝて山田かりいほのとなりて衣うつなり

弘長百首歌たてまつりける時擣衣

前大納言為氏

露霜のをく里人のから衣たれも秋さむしよりうつなるを

亀山殿にて五首歌たてまつりける時連夜擣衣

源具行朝臣

里人の猶夜の数を志る霜の志るとなく衣うつらん

久安百首歌たてまつりける時

花園左大臣家小大進

から衣さゆる霜ふかくわひてうちもねられぬ身とや高砂

文保百首歌たてまつりける時

右大納言実教

秋ふかきや夜さむにぬる月影をしきてそ霜とうつ衣かな

一品内親王とき乃四季屏風に

関白太政大臣

深ゆく袖に夜さむもしらて霜の志らぬ衣うつ月也

西園寺入道前太政大臣家にて三十六首歌読侍りに

前大納言為家

あきれ猶たまを衣へるかれ持つの月にうらみて衣うつらし

題しらす

平時廣

衣うつ志つかにかけのたつ秋を露にまさるもまたかゝりける

前大僧正實伊

林鐘の残雲の月は有明のたくひまれなりけれ

後京極摂政家哥合野風

従二位家隆

霜ふかき野はいさよひの中に菊の枝よりあらし吹

萩すゝき次

志賀の浦に吹る色も嵐にみたれ山の[illegible]つきにけり

前大納言資季

月かけてうつろふ[illegible]んとみゆれ露かりさの庭の菊

贈従三位為子

前大納言為世

うつり雑の菊はなりにけり[illegible]露とみえけれ

謙徳公

きえひしさ色かはるやかれ菊花に[illegible]露のなけは遠

延喜御時菊合に　貫之

河のほとりの物の菊花さけやらぬ根そかへてさりける

坂上是則

わきてこの白き[illegible]菊あれはあすそむもの色にみえける

寿子従西河にたちいて白[illegible]秋と云

事ゝをかしくみえ侍りける

野の色はちくさにさやけき[illegible]てはいさん

秋歌とて　御製

今よりは秋の[illegible]野の萩花露むすふ也

人麿

あまてるや神のいはとのひかりとてさきそめてけん霞遠

題しらす　　読人しらす

新玉のとしのきえぬかすみかすめる三笠の山に立つきにけり

千首哥よませ給ひに

後宇多院御製

秋寒み紅葉の山のはのころて露霜をけは色つきにけり

雑哥中に　　前大僧正道性

たつたの杜よりもみちの色やまさるらむ松のあらしの紅葉

建保四年百首哥たてまつりし時

西園寺入道前太政大臣

時雨ゆく秋のしらきもおもひとりえぬちりつもる山の錦志か栄

伏見院に千首哥講せられし時　　前中納言為相

をくら山松の木すゑに色見えて時雨は過ぬる後になりけり

題しらす　　後九条前内大臣

那須の浅茅にみる色時雨ゆく紅葉の色のふかけれは紅葉ちる

内大臣

時雨ゆくかたにくもりて雲のたえまやはれてたえまゆく方の紅葉

寶治二百首哥たてまつりし時枯紅葉

皇太后宮大夫俊成女

志くれゆく山のむかひの梢も色さへそのこるかたの紅葉

百首哥たてまつりし時

中宮大夫師賢

しくれ行時雨もまたにあらしふく深き木すゑの衣ぬきけり

題しらす　順徳院御製

紅葉する秋のけしきを今さらに紅のあさきの山人

権中納言公雄

うつりゆく梢の日数はくれなゐの色にかへ行さえ秋の木葉

題しらす　読人しらす

いにしへの神風さそふ山のあさ霧にまかふ紅葉のちりの通

常盤井入道前太政大臣

庭もせに志けりしことは親窓の桐の葉ちるに秋風そふ

衣笠前内大臣

木枯の音そへて紅葉の色を見にさそへはいさそふ嵐川波

寶治百首歌たてまつりける時河紅葉

冷泉前太政大臣

から錦たつたかはらに秋くれて紅葉をやける瀬々の岩波

正元大日吉大宮歌合に

権大納言長家

大井河瀬にせかれて秋くれは紅葉のしからみとくかはるらん

瀧紅葉といふ事を　式部卿久明親王

色みするそら山の時雨もそめぬこそ此の瀬々の紅葉

暮秋の心を　前大納言為家

ことしもれ空のたてにはしくれそもまた染なる紅葉ちる

前大僧正禅助

うつりゆく日数もしらぬ…

弘長百首歌奉りける時

大蔵卿隆博

露霜のをきゆく…の袖に…

家五十首歌中

惟明親王

あけゆけば霜を…の袖に…

よみ人

續後拾遺和歌集巻第六

冬哥

題しらず

伏見院御製

…里の紅葉に時ありて…

初冬の心をよみ侍りける

前参議雅有

うつりける…冬は…

後一条入道前関白左大臣

草も木も…色…

題しらず

前関白左大臣

久堅の月にかはらぬ…

文保百首歌たてまつりし時

普隨利花院前関白内大臣

晴くもりきのふ志くれし雨の名残にて今日は又

時雨知時といふ題を　前中納言定家

いつはりのなき世なりけり神な月たか誠より時雨そめけむ

題志らす　参議雅経

雲かゝるみ山下嵐に志くれきてあけぬる葉ぬま時雨する哉

右大臣

風さむみ山は雪なる志くれ雲ましりておつる志くれぬる哉

権中納言国信

あきはてゝふく人もなきとしのあたりの木葉ちらぬ時雨とそきく

崇徳院御製

木枯に紅葉ちりゆく山めくりなか〳〵色の空もみえけむ

落葉をよませ給ける　法印隆寛

かねてよりちるとひそめし紅葉の落るをいつの神なひの杜

中納言家成家小式部会に時雨の時をよみて侍ける

大宮太政大臣

もろともに露もあらそひ神なひの三室の山は木葉ちるらん

恂子内親王家歌合に風前落葉

読人志らす

ともは山ゆふべの後のみちも紅葉をとめる神の風もなたむらん

寛治五年十月大井河の御幸ありて落葉満水と

云事をよませ給ける　白河院御製

大井河かはせにこえて紅葉はにたつ浪ゝたかき瀬ゆく舟

題不知　　順徳院御製

みなかみは紅葉や峯のこすゑより河せにこそは流れ嵐ふくらむ

後深草院弁内侍

さそひつる嵐の河の浪かけも錦に月や秋の紅葉ん

律師永観

紅葉ちる山路に月影のあらしも冬の色さそひけり

右大臣に侍りける時家歌合よみ侍りける

後法性寺入道前関白太政大臣

志木の庭にたゝ深草の木葉をそこそみわかぬ冬の時雨哉

百首歌の中に

式子内親王

冬来てはいくたひならぬかせの庭に木葉時雨の絶ゆる乱き

元亨三年八月大覚寺殿に行幸ありて人々歌

とさふらひて家につかうまつりし時落葉といふ事を

後宇多院御製

山里はちるもみたれ木葉の道たえて冬は人めのかれぬなりけり

千五百番歌合に

宜秋門院丹後

嵐とは冬よりさきに流れて木葉の色そたつかゝる人そ立色

冬歌中に

従三位行能

松山の木葉のうへの霜の消てや深さ冬はこゆるき

嘉元百首歌たてまつりける時落葉

贈従三位為子

荻の葉にはらふの風も霜枯れてうはの空なるしもさびしさ

百首歌奉りし時　　二品法親王覚助

うつろひし籬の木葉は嵐にて霜おきまよふ枯野なる草

題しらず　　道洪法師

おのづから枯れ残るもいろかはり霜の下なる庭の白菊

延喜十七年十月御前菊宴日　　源公忠朝臣

秋の月しられたる菊花枯れて小さくみえし色ある哉

寒草風と云事を　　平維貞

霜むすぶ尾の音に冬はしをれはてゝ枯れゆく萩の上風

霜を　　太宰大弐惟継

末の秋の木の下露や寒からん萩の上葉もむすぶ朝霜

平貞宣

あさ日のさすとみえて嵐にも霜の羽やみえて霜と成らん

原寒草といふ事をよめる　　藤原基任

冬がれたる野辺の草葉をかけて思ふ朝の原は霜さむき庭となり

邦省親王家五十首歌中に寒草　　権律師實性

枯のこる冬野の尾花風さそふ霜をむすびそめつゝ

題しらず　　藤原秀長

冴えわたる夜ごとにあらぶ風の庭に霜のあさひ霜むすぶ也

後九条前内大臣

紀の国や吹上乃浜の浅茅原霜枯まさる沖つ浦風

平貞時

難波かた入江の風の吹にて葦乃末葉に置ける初霜

二条院讃岐

なにはかた汀の葦ハ霜かれてなたのすて舟あらはなるらん

伏見院御製

霜さむき難波の葦乃冬かれに風もたまらぬやかて冬寺

土御門院御製

難波江やわかの夜風に払はれて葦乃葉そさわき

宝治百首に寒芦といふ事を

前大納言基良

冬されは入江乃葦の葉枯〻てみなと風にそ浪も寒けき

百首歌奉りし時

関白太政大臣

難波かた芦乃葉分にふく風のうらの波や寄る浦人

寒芦を

為道朝臣

みなと江の芦のかれ葉ハさやさやと汐やみつらん浦風そ吹

左京大夫顕輔家歌合に

大納言成通

むろ田の川のみきハ河ゝ流らかて風さへ月に芦の枯はき

河辺冬月と云事を

常磐井入道前太政大臣

すみわたる庵そうらの河のおとにも月のかけそて見えけり

性助法親王家の五十首歌に

前大納言為氏

冬の夜ハ霜をかさねてかたしきのまさる橋ひめの袖

題しらす

後二条院御製

天の河いらぬとみえて新たなる雲も空をわけていりかたの空

豊明節会をよませ給ける

御製

あまつ風袖さむからしとよあかりの雲ゐをわけてあけかたのそら

嘉元百首歌奉りける時千鳥

六条内大臣

かはしかとわたる千鳥たちかへりいく浦波をかけてなくらん

題しらす

平政村朝臣

風さむみ夕波たかきあら磯にむれて千鳥の浦つたふなり

人丸

あふみの海夕波千鳥なかなけは心も志のにむかしおもほゆ

建長五年後嵯峨院三首歌講せられける時寒夜千鳥

土御門入道内大臣

志ほの瀬戸の浪はおなしくそのまゝにさえて千鳥なくなれ

法性寺入道前関白太政大臣内大臣に侍ける時家歌合に

又千鳥

源顕国朝臣

よもすから浦の磯のまつ千鳥はなれぬ次鳴まよふ也

深夜千鳥といふ事をよませ給ける

高倉院御製

浪のうへに梅さきにけり浦人のころもにかほる春をまつらん

宰相典侍

冬夜中に

なにはかた浦よりをちに友千鳥夜わたる中の声そかなしき

山階入道左大臣家にて河千鳥といふ事を

津守国助

数ならぬかすかに寒き夜半の田上河よ千鳥なく也

題しらす

昭慶門院一条

ふけさるさゆる河瀬の月冴てわたる千鳥の声そ添ぬる

院御製

友千鳥月に志賀(?)の静かにて鳴こゑ(?)の波にのこる(?)の枕哉

千五百番歌合に

嘉陽門院越前

よあけの月に出しかたのみをと浦浪に千鳥なく明

題しらす

俊恵法師

千鳥なく井手(?)の川風さえて波まのつきの夜半の明かた

太貳三位

さそはれてくる広沢の池の水にうかふ水鳥の声風かなれ

亀山殿にて人々題をさくりて七百首歌つかうまつりけるに池水鳥

民部卿為藤

池水にうきてぬるなるをしかものさのみなかなくともなき鳴

題しらす

寂蓮法師

大井河ゐせきの水やまさるらんはやせにのほる数くたる也

建保五年内裏歌合に冬河風

従二位家隆

龍田川木葉ふきよるの志からみに風のかけたるかなりけり
氷とそ見ゆ

藤原重經

なつと河さゆるあらしを吹わたる嵐は山隠らやまのこほるなる

源邦長朝臣

ゆく山の岩ね絶志水冬さむみとおもほえむもまたふかき音なりけり

恵慶法師

冬上ふかみむとへは志そる瀧の志らいとみたれけり

法橋顕昭

湊の氷とちそ

舟むすふ氷のみなとの朝ぼらけくたくる音のさやけさ

文保百首歌よてまつりまうしに

後花山院内大臣

山嵐は河やく雲をふく藤の梢ほまつもとめて有ける霰

前権僧正雲雅

風さむみ我あかす此山の尾上に人とふ冬は河浪の玉ちるなり

冬哥中に

鎌倉右大臣

雲ふかき深山のあらしさえさえて伊駒の嶽に霰ふるらし

大江宗秀

さゆる夜の旅ねの枕夢たえて嵐をそへてふる霰かな

前中納言定家

大空にたえぬ雪ましてしくれわたるまさみのつ野への竹原

野径霰と　藤原為名

かりゆけは交野のみのゝ篠のうへにたまらてかゝる霰かな
花しら波

後鳥羽院御製

みかりするかりはの小野に風さえてとたちかしこに霰ふる也

前大納言為家家三十五首歌に

信実朝臣

神なひのいはせの杜の冬枯にみむろの山は雪ふりにけり

光明峯寺入道前摂政左大臣家歌合に暮山雪

源有長朝臣

冬かれのゝ杉の山は昔の上に枝見えぬまてつもる白雪

弘長百首歌奉りける時雪

衣笠前内大臣

しら雪のふりにしみねの雪の里まてきえぬ時は来にけり

一品内親王家四季屏風に

右兵衛督為定

あしひきの山のたかねは晴やらてふもとの里にふれる白雪

前大納言為世

こし山に嵐もさそや消のこる松のはのこぬ数のしら雪

貞治百首歌奉りける時積雪

後光厳院御製

数ならぬ松の梢もうつもれて山より高く消のこる白雪

和哥所にて撰者ならせ奉る時屏風に

後鳥羽院宮内卿

住吉の松より雪の浦に散るをまとめるかたの濱風

後宇多院にたてまつりし百首歌中に

惟宗光吉

吹志ほるも山風さえて来るけしきのつもれる白雪

庚申の夜御神楽の後に女房に給ひ侍けるに

祺子内親王家宣旨

雪ふかきみよし野山のすみかには跡たえぬるも道のかなしきをはん

題しらず

津守国夏

たのもしな山の奥まで雪ふみわけて道をさへけふ雪に跡ある

大江貞重

閑雪

わきて秋の日数をさへつもれる雪の志ら川の哭

弘長三年内裏百首歌奉りける時雪朝

前大納言為氏

朝またき誰か跡をもさきにそふみしあとなき庭の白雪

文保百首歌よみてたてまつりける時

権中納言公宗母

志はしとはまちける人の跡もなくふりにけり庭の志ら雪

庭雪を

大江廣房

志ら雪の庭の籬も跡たえてふりにける白雪

権少僧都経信

雪ふかき籬は山とみゆるまでもいにしへの跡をこそのこせ

題しらす　　中納言家持

あら玉の年ゆきかへり春たゝはまつ鶯はわか宿になけ

中納言兼輔

朝な夕な子立枝へも河上の年はへぬれと秋そわすれさ

歳暮乃心を　　前大納言為家

けふことにゆく年かそふるの数そへてをしき月日はかりそ

業忠

續後拾遺和歌集巻第七

物名

ひの木　　好忠

明日まて冬ありけれはかなく暮ひのきてこそ春にはなれ

中納言兼輔

冬されはあひかたへきと春の日の鶯ねそくるかりなれ

ち乃花のにほひといひけりかり城身くらぬ

紫式部

花といはゝ川せのゆかしひかりとこ人数にもとめなき

久安百首歌奉りける時かすみ柳さくら

皇太后宮大夫俊成

花の色にあかぬおもひはいかにしてめやすき花さの宿ふさかん

風かさき　後頼朝臣

志賀の浦やさゝ浪にたてる花桜それも花波のさき乱き

かゝかゝし　前大納言為氏

あらき風はらふのかけをしり顔にちりゆくそ世をは恨そね

亭子院歌合子日松

かくしつゝ子日するかのみてなからへて我もゝのゝ日のまつをくらへん　紀友則

さくら　正三位知家

春ことにかつ消えかての霞むまもしけき桜花にたへぬる

なをしこの花　後頼朝臣

あさ緑霞かきなそてこそ花の風のさそふはるにほひそめけん

久安百首歌めしける時はるの花

崇徳院御製

ゆくては花散るをみてもやまさくらけふはかりこそたちとまらめ

きりかゝるとも絶ぬ　前中納言匡房

清き菜の家なる花そめつらきちるを見てのみなかき家にさけ

千首歌よませ給ひける時

後宇多院御製

桜さく風にしたかふ我袖にあすの花さへちらさてそちらせ

うら我なくといふらむ

藤原相如

わた川海の波にうかへる浮舟はいつさしてなくさてかはれるらし
正治二年百首哥たてまつりける時よみ侍りける
皇太后宮大夫俊成
やまとらやたにかひのはりのやまし川くみて井手のたまみつ
たかくみるを
津守国助
数いて白雲のたえまの道に跡とめて志ろ庵にかよふ志ら川の関
来てもしつら
入道前太政大臣
と山風たえて秋やかん白妙の霧にうつろへる袖はめくるまた
たれ松にひとりかへ
観意法師
かけ見ゆる霧の渡さへ河千鳥やとるをとりかへる袖志ほりつ
後西園寺入道前太政大臣
こりけ哉

流しもひともむかしは聞やさ卿のなひとりい萩かたに秋る人
さそひ
つねなりと見えし志けきて流れもひちに袖やかへつき
かくもろひ
隆信朝臣
志のひありとき人もなからをかひなく秋袖かへ給ふ
きちえなる里
二條太皇太后宮大貳
君か代はちよを世々ともふくすゑの田のみのりに袖なしなき志けりは流そを
志やうこ
前左大臣
松の音もさもやうこえる我君か代のたえひなする人
かへる雁
圓光院入道前関白太政大臣
梅の花かすみにつつむ山本のいとも志らぬ春や来ぬ覧と

源氏の巻く紫式部か名付けゝる中にいふ題

権中納言光雄

袖にも花の香かほりとしら野の若紫春の手習

松風　　と見人志は浪

かゝる夜すから霧のたえま紫鈴虫の日も夕の篝火や帰るなり

係ちし水　　関白太政大臣

我身にたえしとはかれし水に緑の思ひの葛紫も移ろふもあり

いろさはとりあやすき橋姫かたくゝる宇治ゆき

和泉式部

かきたえて風の前こそ雨ふせつき係るきりの色

ゆきまも

續後拾遺和歌集巻第八

離別哥

こし國へまかりける人にたきものつかはすとて

左近大将朝光

わか道路にかへるにそふる玉くしけあけて見るまの手にも風や

返し

讀人しらす

むかしのみあはれもかくあはれさにこそ別なるもなかさき涙

今出河院近衛

遠きをはなにとまたみんかなしきはいかにわかれのおもひなるらん

信實朝臣

別とともに

ゆくすゑにおもひのこさんふるさとをわかれ

よみ人しらす

志ろたへの袖のわかれはおもひしれとおもひしらせてゆくへかなし

堀河院百首歌よみ侍りけるに

修理大夫顕季

我か衣袖のわかれにかなしきはたのむこゝろのおもひおく露

あつまへくたる人の暁にたちけるに

法印定為

稲荷山をたちいてゝ東路をゆくらんこゝろすゑのことかなしき

たちわかれける

平親世

たかきの命なれともおもひはいかにかきりはあらし秋

安嘉門院甲斐こし前へまかりけるにたまはする

返事に

前大納言為氏

うしやたちのちる塩かまに近くありしかひもなく紅葉(?)をしたふころのなみ(?)

河川まて雨りまち時人の別れにこゝろふかさの

読人不知

たのむ世とおもひなしてもあかさ(?)ぬをむかしのおもひをはかさ(?)別れかな

源道済筑前守にてくたり侍りけるに

能因法師

なかなかにいきての別れはかなしきをこはいかにせんたつみ(?)くへ

題しらす

八条院六条

たのしとおもひしはそれかとおもへやしら露の別れのたよりなるらん

大納言師氏

わかれ行空をかけりとみなれのいそきもとまぬる袖かな

こと国へまかる人につかはしける

藤原元真

袖のうへにかゝりし露をかたみにてまつちの草のゆかりにそ

別を

前参議雅有

旅衣露けきゆくもたひねにそ露の袖をはとひこせよ

津守国助

都人こゝの浪に露とはいはまし草のまくらをおもひしるらん

たひやのいさまて下空のほに申なとくりける

菅原相如

吹風のさそふてはかなしいつまても秋のゝ露のよるへを

題しらす　人丸

あきれてみよといふなし草枕たひゆく君かかへりくるまて

久安百首たてまつりける時離別

皇太后宮大夫俊成

暁と成ていとゝ涙のかはらをも君そとゝめて涙おもへり

しらぬへき人をゆく人の饑もともそらめかな

貫之

君かゆくかたときけは月かけもまた挂山そたのひさき

源順能登守にてくたり侍ける時よみ侍ける

中務

いかにして我をきゝしりとかやまの雪の跡はるけきをめや

こえ(?)ゆく人に

康資王母

ゆく旅は色かはるけれ雲みくさ花の上をおもひやるかな

伊予国に侍ける守の許にまかりけるにつかはしける

能因法師

おもひけさ都なりとも見さ秋津のかくちなくかなしきと後よ

別のことをよめる

常盤井入道前太政大臣

あふ坂の出るけるを数たにとふ涙の色に我袖ぬれて

平宗宣朝臣あつまへくたりける時よみ侍ける

権中納言公雄

まち侘てはかゝるあふ坂の関もゆくかなの涙を道

返し

平宗宣朝臣

関のとさしのみ代にはミちのへりてあふ坂越えたのとなりゆめ
あつまのかたへ罷りけるに相坂の関にてよめる
民部卿成範
古へもいかに契りし別れにて誰あふ坂の関となつけん
題しらす
前大納言為家
たちかへりきえ之旅の心せらなに小笹は露におきぬ露
ありまへの旅人の馬清水手にてこそ見え侍る
西園寺入道前太政大臣
行日いそく山の旅は小ぬめ袖をもぬらしある思
名はたてれん

續後拾遺和歌集巻第九
羇旅哥

亀山院位におはしましける時への花をさそひて旅行人の路につきて残
旅人のゆくへいそくたひの小道あつ御代の旅をすて
前大納言為氏
千首歌よませ給ひける時
後宇多院御製
旅は都をこめてあまつゆふひの夕暮の舟のゆく末遠
題しらす
式子内親王
都をは雲のなかにふかてすてある草枕もかさなる旅の中山

夜思暇催春といふ事を　皇太后宮大夫俊成

草枕こよひ旅ねのかりにもいかなる人の宿にかへるらんとこ夜のもと

題しらす　惟明親王

草の原むすひもとひそめつゝかりねの露にひとりそやとる夜はの露

寛元百首歌よませたまひける時羇旅

前大納言俊定

あり明の月もしくれし旅枕ころも袖に露ちるあさのゝ篠原

題しらす　平泰時

日くれはおなし露わけし旅衣あさ秋なる野ちの篠原

前大納言實教

まよひ夜すそ野のをはなうちなひき袖をひさしらぬ嵐夜風

院御製

都にはなれしいろに旅衣あらき野山の露やかさねかさねん

正治二年百首歌よませたまひける時羇旅

前大納言忠良

露しけきをやらはれぬ宿りにも秋とゝめけん旅ねかな

題しらす　後鳥羽院御製

露しけき野しあさの旅衣すそはにはこさぬらも袖の露

弘長百首歌よませたまひける時羇旅

従二位行家

草枕わするゝ旅をかへるては都の夢そ成にける

右兵衛督基氏

一　たのしんを

うきねする舟のうちの草枕ひとり寝覚の数つもるらん

道洪法師

まれ我あれは草枕よいくよねて古郷遠く思ひやるらん

旅泊夢と云事を　尊珠法親王

うら浪のあらき磯辺の松風にむすふ枕の夢そみしかき

前大納言為世

舟とむるみなとの浪のよるの夢さへ絶なきやかよふ故郷

題しらす

恵助法親王

わかれ行風にまかせて行舟のあとかたもなき浪の上かな

衣笠前内大臣

よその京半と思ひて行舟のゆくへはたゝ数まさる日そ

都よりあかしにまかりて後前大僧正慈鎮のもとへよみてつかはしける中に

前右近大将頼朝

かへる浪君にとのみそことつてて浜名の橋の夕暮の空

嘉元百首歌読進ける時

津守国冬

浦つたひ旅ゆきまきて宿とたに思ふ方ぬ人そ結ふらん

久安百首歌に羈旅　待賢門院堀河

たちかへりみえこれなる猶故郷の思ふかはことかりの宿とこそきけ

題しらす

平氏村

夕されは野原にむすふ野への松風にとまりや草の枕むすはん

読人しらず

草枕ゆふ露やとる月は旅の袖にもあはれなりけり

行雲法師

草ゆひて暁露にぬれていな風や旅ねの袖もしをれはてなん

住吉社歌合とて人々よみ侍りける時旅宿時雨を

土御門内大臣

しぐれする音にいくたび夢覚めて草の枕をあかしかねけん

題しらず

藤原重貞

旅ねするさ夜の中山明ぬとてけさそたちわたる峯の横雲

藤原保能

よそ雲にたちぬめかくしかくれはて世はあくるさ夜の中山

寛元百首歌に旅

萬秋門院

志ら雲のかゝる旅寝のかさなりて都をおもふさや中山

題しらず

世良親王

ゆく末は山のいくへかさなりてそらをかぎりのみねの白雲

旅行を

平英時

ゆく末は海とそみゆる旅衣たちかへりてや宿をとはまし

左大臣

あふ坂の山こえて旅の宿もなくもとめねさはや宿やとはまし

正治百首歌たてまつりける時羇旅

小侍従

なきひとや宿かりそめの旅人は津の国にやとも人のとゝむる

たのしかなと　　津守国平

篁かとそ磯のとまやに宿とへは浦風さえて千鳥なくなり

殷富門院大輔すゝめ侍ける百首歌中に

前中納言定家

桜狩もろ葉ちりたぬ宿の岸かはちとせのあとのあけほの

題しらす

前大僧正道玄

あけほのの夢の名残いそく桜かなたちそはれてかすみや隔らん

和哥所にて六首歌よみてたてまつりしに旅歌

鴨長明

まとひ夜川暁のわかれしらぬ袖はさてや夜露の

あつまのかたへまかりける時逢坂関ふく嵐のいと寒く

侍けれは　　源親長朝臣

逢坂の関吹嵐心してさこそ旅ねのなくさめ也

後京極摂政家十首歌に海辺閑旅と

法橋顕昭

旅ねしてみなとに浦の月見れはいつの夜すからなみのきこゆなるらん

題しらす

権律師雲禅

いさり火にこそ浦をもたのむ浦見ゆる浪のよるとそおもひたちぬれ

堀河院百首に閑

祐子内親王家紀伊

あふせなき思ひそやまのたかねにもなみのたつ志らかはの関

普光園入道前関白家にて七百首歌よみ侍

りけるに旅

源兼氏朝臣

限あれはいふも志らぬ海の宮ゐにそゆけ松も白波そたつ

榊葉を　　藤原基任

榊とり榊の山の葉のかはらぬはいつもひとしき色にそ有ける

津守経国

志らゆふを波にかけてそあふく神のまへの森のしくれ山風

前大納言為家

題しらす

榊葉のゆふしてかけて風の音も秋の宿とそなりけれ井筒

行たゝ

續後拾遺和歌集巻第十

賀歌

堀河院位におはしましける時色のたえせぬ祝の心を
はらさせ侍りける時よみ侍る

俊頼朝臣

手とりてちとせも御代をはかれと志ら浜や底まても露をきてみるあたけなき

禖子内親王家歌合にいはひの心を

読人志らす

君か代はあまの川ともあかすかもひさしからつる岩ねの松のちきりを

禖子内親王家歌合に千年山をよめる

志きりし岩橋なれゝ手をせきといふも志らぬ代のためしなるらん

題しらす　　　　　　　　　　僧正遍昭

よろ人の古き跡をもたつねつゝ八千代をいはふ心あらなや

千首歌よませ給ひけるに

後宇多院御製

なかき世のやつきせぬ末まてに世にあふ君かかけとなるらむ

文保百首歌たてまつりける時

法印定為

さゝれ石の海の浜かさとなる迄に未を保つ代のかみを

弘安八年三月北准后貞子九十賀行はせける時よみ給ひける

太政大臣隆将

なかき世て十かへりの春は九十にひとつたれるのちのきく

同十年正月内裏にて萬歳春といふ事を講せられけるに

後光院入道前関白太政大臣

あらたまの若菜はいはふ君か代の末はかきりもあらしとそ思ふ

卯杖をよみ給ひける

法成寺入道前摂政太政大臣

神代より年のはしめにきる杖はいはひそめける春のまろうと

白河院かくし子日志給ひけるに

宇治入道前関白太政大臣

ひきやまむむれてやかはす二葉より行末遠き松の梢を

永保四年内裏にて子日

後京極入道前関白太政大臣

ちとせある小子日の松をさゝへて君か千とせそかねて志らるゝ

松にこそみとめつ　中納言朝忠

祢のひする野辺ならねとも我宿の松をちとせの松やみらめ

建治元年亀山院に松契千年といふ事を講せ
られけるとき　前大納言為氏

いくかへり松のみとりをかさねてん君かためしの春の松枝

式部卿久明親王家にて梅花久芳といふ事をよめる

平貞時朝臣

宮ゐより千とせの春を君か代にかさねてにほふ庭の梅之

後二条院位の御時梅花盛久といふ事を講
せさせ給ひしに　前関白左大臣

くる春も日数はかさぬる梅もなほひさしく風にちりかゝる

天暦御時花宴哥　謙徳公

君か代は色もかはらてもゝとせにかけてたのまる花の
花ゝに

従三位範宗

花をみなうらやむ山のさくら木のもとに千代を庭にみえ

正応二年三月鳥羽殿に朝覲行幸時花添春色
といふ事を講せさせ給ひし

一条内大臣

花の色も春もかはらぬこのひさしや今日のみゆきのためしなるらん

寛治八年八月十五夜鳥羽殿にて泛池上月といふ
事を

大納言公実

よろつ代をさえわたる池の水にやとりそむる秋の月かけ

建保六年八月中殿にて池月久明といふ事を講せられ侍りける時よみ侍りける
正三位知家
池水はちよのかけまてあらはれぬ末とほき月のすむらん
建仁元年八月十五夜和歌所撰歌合に月多秋友
後京極摂政前太政大臣
月みてそ人もおもはし君か代は秋の千とせのかすもしるらん
文治六年女御入内屏風に
前中納言定家
君か代は千世とながるゝさかつきにうかへる月のかすくみゆらん
宇治入道前関白家歌合に池水を
権中納言定頼
年をへてすむへき君か宿なれは池のみきはもあかすそありける
長保五年法成寺入道前摂政太政大臣家歌合に
水辺松といふことを
大江嘉言
君か代のためしにきそふ松なれは千代や水のそこまてもすむらん
正子内親王家に絵合し侍りけるにかねのみこによみて侍りける歌
相模
君か代のけしきをみるに霜ふりてむすふ江の浦に松そ木高き
仁和御時大嘗会の悠紀方伊勢国風俗
大伴黒主
伊勢の海のなかきなきさに住鶴の千とせの数を君にまかせん
長和元年大嘗会主基方神楽歌中山

源兼澄

君か御代なかゝらむしおさ(?)ゆきなかれそらん人のかゝらむは(?)

文保二年大嘗会悠紀方屏風近江国[illegible]郷

前大納言俊光

君か代は千とせかさねてそいやはふるき

ゆきたか乃里